論文概要

○　論文題目　：　通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感に関する研究

○　指導教員

医学医療系　坂田由美子　教授

（所属）　人間総合科学研究科　生命システム医学専攻

（氏名）　成澤 明

【目的】

本研究は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者を対象に、孤独感の実態と孤独感に関連する要因を明らかにすることを目的とした。そして、予備的検討として孤独感が生理学的指標に及ぼす影響と孤独感を緩和する支援方法について検討した。

【対象と方法】

本研究では、孤独感の定義を孤独感尺度得点が高いことに加え、ソーシャルネットワークとソーシャルサポート尺度得点が低い高齢者を孤独感がある状態とした。調査対象者は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者とし、質問紙を用いた聞き取り調査と生理学的指標（血圧・心拍・自律神経機能）の測定を実施した。

孤独感との関連を明らかにする要因は、文献検討において 2012-2016 年に孤独感との関連が検討されていた項目で、研究結果が一致していない性別、年齢、家族形態、社会参加、住宅形態、居住地域とした。孤独感と各要因でχ^2検定を行い、各項目間との関連の有意性を確認し、孤独感の有無を従属変数とする多重ロジスティック回帰分析（変数減少法：尤度比）を行った。また、予備的検討として孤独感の生理学的指標に及ぼす影響を検討するために、孤独感と各要因でχ^2検定を行い、孤独感の有無を説明変数、生理学的指標（血圧異常：安静時血圧異常、起立時血圧変動の有無、心拍異常：安静時心拍異常、起立・立位時心拍変動の有無、自律神経機能異常：活動の大きさ・バランス・反応力・切替力・回復力異常の有無）を従属変数とするロジスティック回帰分析（変数減少法：尤度比）を行った。さらに、地域在住高齢者に対するコラージュの効果を検証し、孤独感を緩和する支援方法を検討するために事例検討を行った。

【結果】

調査対象者は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者 200 名であり、男性 53 名（26.5%）、女性 147 名（73.5%）であった。改訂版 UCLA 孤独感尺度（第 3 版）得点の平均は 38.44±9.43 点であった。孤独感の定義を孤独感尺度得点が高いことに加え、ソーシャルネットワークとソーシャルサポート尺度得点が低い「孤独感あり群」は 45 名（22.6%）、「孤独感なし群」は 154 名（77.4%）であった。

χ^2検定の結果、「孤独感あり群」では、社会参加していない（p=0.010）、集合住宅に住んでいる（p=0.036）高齢者が有意に多かった。また、多重ロジスティック回帰分析の結果、社会参加（オッズ比 0.167, 95%CI;0.04-0.74, p=0.018）、住宅形態（オッズ比 0.379, 95%CI;0.18-0.79, p=0.009）が孤独感に有意な関連があった。

生理学的指標については、全ての質問紙に回答し、データ安定度が安静時・立位時ともに 70%以上で不整脈のない高齢者 143 名を分析対象とした。孤独感と血圧・心拍との関連では有意差のある項目は認められなかった。孤独感と自律神経機能との関連では、χ^2検定の結果、「孤独感あり群」で自律神経機能の回復力（⊿CCV(HF)）に異常のある高齢者が有意に多

かった（p=0.019）。また、ロジスティック回帰分析の結果でも、孤独感（オッズ比 2.571, 95%Cl;1.15-5.74, p=0.021）と有意な関連があった。

孤独感を緩和する支援方法としてのコラージュの効果については、気持ちの改善は認めたものの、孤独感、生理学的指標に対する効果は認められなかった。

【考察】

社会参加の有無、住宅形態が通所介護サービスを利用している高齢者の孤独感に関連することが明らかになり、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感を把握する上で重要な要因となることが示唆された。

孤独感の及ぼす影響については、孤独感が生理学的指標（血圧・心拍・自律神経機能）に影響を及ぼすことを仮説として予備的に検討したが、寄与率や判別正解率などから他の要因の影響が大きく、今回の調査では、孤独感の生理学的指標への影響はなかったと考える。しかし、孤独感が生理学的指標に及ぼす影響を明らかにした研究蓄積は少なく、検証までには至っていないことから、今後も調査対象者数を増やし、孤独感の生理学的指標に及ぼす影響を検討していく必要がある。

孤独感を緩和するための支援方法の検討については、事例検討となったため、コラージュの孤独感に対する効果は検証するまでには至らなかった。しかし、コラージュを客観的評価により生理学的指標により評価した研究蓄積は少なく、今後も調査対象者を増やすとともに、コラージュ制作の回数についても検討を重ねながら、地域在住高齢者の孤独感を緩和する支援方法を検討してく必要がある

【結論】

本研究は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感の実態と孤独感に関連する要因を明らかにすることを目的とした。そして、予備的検討として孤独感が生理学的指標に及ぼす影響と孤独感を緩和する支援方法について検討した。

1. 本研究で定義した、孤独感が高く、ソーシャルネットワーク、ソーシャルサポートが低い高齢者は、社会参加がなく集合住宅に住んでいる高齢者に多いことが明らかとなった。このことから、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感を把握する上で、社会参加の有無や住宅形態の情報は重要である。
2. 高齢者の孤独感が及ぼす影響として、高齢者の孤独感と生理学的指標との関連は認められなかった。
3. 地域在住高齢者へのコラージュの効果は認められず、孤独感を緩和する支援方法としてコラージュの効果の検証には至らなかった。

本研究では、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の孤独感を把握するための要因が明らかになり、高齢者の孤独感は、社会参加の有無と住宅形態を活用して把握していく。そして、今回は予備的検討として孤独感の生理学的指標に及ぼす影響は認められなかったが、今後も調査対象者を拡大し、高齢者の孤独感が生理学的指標に及ぼす影響と孤独感を緩和する支援方法の検討を継続して実施していく。